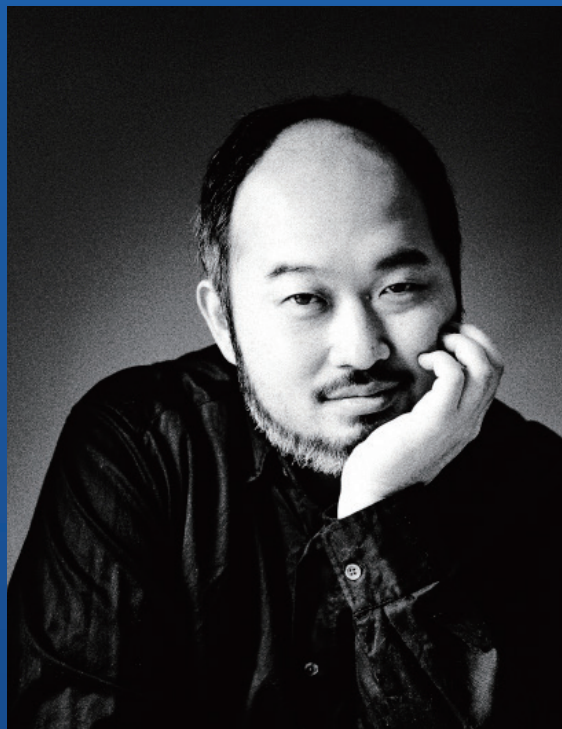


リア王 KING LEAR

by William Shakespeare

極大と極小、二つの世界を同時に味わうシェイクスピア作品



SPECIAL Interview

取材・文／川添史子

『Lear-KING LEAR』演出

森新太郎

シェイクスピアの四大悲劇の中でも最高峰に位置する『リア王』を、森新太郎（演出）×内野聖陽（主演）により上演！物語の舞台は古代ブリテン。三人の娘に領土を譲ると決めたリア王は、やがて長女と次女に裏切られ、狂乱しながら嵐の荒野をさまよい……。大スケールで描かれる老王の怒りと悲しみ、そして最後にたどり着く境地とは——テキストを深く掘り下げ、真っ向から対峙し、新たに読み解く…繊細かつ大胆な舞台の秘密を、本作の演出を手掛けた森新太郎に聞いた。

——ひと足早く東京公演を拝見しましたが、森さんらしい粘り強い探究心が横溢した、熱量の高い、鮮烈な舞台でした。まずは森演出版『リア王』で特に注目してほしいポイントを教えてください。

今回、演出の最大の軸になったと感じているのは、巨大なライトグレーの三方壁で囲まれた美術です。宮廷の場面だろうが、荒野の場面だろうが、説明的なものはほぼ置かず、お客様の想像力を最大限に引き出していく効果を狙ってみました。そもそもシェイクスピアが生きていた時代は、照明や舞台美術なんてものがほとんどない、半野外劇場の「グローブ座」で上演されていました。台詞と役者の肉体、イメージによって観客を物語の世界に誘っていたわけですね。めくるめく世界を“想像していく”行為は、人間にしか許されていない、とても豊かな体験だと考えています。

——リア王を演じる内野聖陽さんの魅力についても教えてください。

内野さんのリアは、第一声からお客様を圧倒するパワフルで無敵な存在でありつつ、3 時間を経た終幕には「こんなに無力な老人だったのか」という状態にまでドラマチックに変化していきます。身体の使い方、声の発し方など、僕にとっては全てにおいてやはり“舞台の人”であり、全幅の信頼を置く俳優さんですね。またとてもチャームिंगな方でもあって、それが今回、リアの新しい造形にうまく繋がっているとも感じています。特に正気を失ってからが何とも可愛らしく…内野さんだからこそつくり上げられる特別なリアを、ぜひ多くの方に目撃していただきたいです。

——三姉妹の造形にもオープニングから新鮮味を感じました。多くの舞台では、父親にお世辞を言って利益を得ようとする姉二人（ゴネルとリーガン）、それに対して誠実であろうとする三女コーディリアの精神的な断絶は大きなものですが、今回はひと味違いますね。

稽古場で、「分かりやすい勧善懲悪な物語って、果たして面白いのかな」という話になったんですよ。そこで、父親の乱心さえなければ意外と仲のいい姉妹だったのではないかと設定して流れをつくってみたら、前半と後半における人間模様の落差がずっと大きくなったんです。「我々の秩序なんて、わずかな出来事であつという間にガラガラと音を立てて崩れていく」というのが、今作で自分の中に持っていたテーマ。三姉妹に限らず、全ての役においてこの“落差”が大きくなるように設計しています。

——現代において『リア王』の物語は、どう響くと思われますか？

世界情勢を眺めていても、つくづく「人間って愚かな生き物だな」と感じる昨今。でも人間社会の矛盾や絶望に満ちた『リア王』を演出しながらそこを突き詰めていくと、「いや、それでもこの世には生きる価値がある」と思えるような、救いの光がふっと差し込む瞬間があるんです。それは創作過程における偶然の産物に過ぎないのですが…やはりこうした瞬間に出合えるところが、シェイクスピア作品を演出する喜びでしょうね。あと実際に上演がスタートし、お客様の反応を見ると、やはり“古い”が、今の日本人にとって身近な問題なのだと実感しています。思うに『リア王』のすごいところは、「老いる＝悲しいだけではない」ことが提示されている点。リアは全てを失った結果、本当に自分にとって大事なものに到達します。悲劇であるにもかかわらず、多くのお客様が不思議と活力を得られるのではないのでしょうか。

——今回はコーディリアと道化を一人の役者が演じ、ラストに大きな意味が立ち上がります。シェイクスピアの時代も同一の少年俳優が演じていた説がありますし、王に対し真実や苦言を呈することが許された“特権的な批判者”である道化の解釈は、『リア王』を見比べる楽しみの一つです。

道化とコーディリアは同時に舞台上に登場する場面がないので、兼ねることが可能なんですよ。終幕、コーディリアの亡骸を前にし

してリアが「俺の阿呆（道化）が絞め殺された！」と叫ぶ台詞があるのですが、ここは全ての演出家が「どうしようか」と悩むところでしょう。僕も僕なりにコーディリアと道化の関係性について考え、「二人の共通点はリアに対する愛情ではないか」という結論に行き着きました。真っすぐに父を慕うコーディリアと、王の愚かさを辛辣な皮肉で指摘する道化では、その愛情表現は随分と違います。でも道化は嵐の中でもリアにずっと付き添いながら、懸命に冗談を言い続ける。僕なんかはここに、「これ以上の愛はないだろう」とグッとぎちゃうんですよ。両役を同じ俳優が演じるのは特に珍しい手法ではありませんが、この二重性によって、道化の存在意義がよりお客様にわかりやすく伝わると考えました。

——リア一家だけではなく、家臣グロスターと二人の息子（長男エドガー、私生児エドモンド）との人間模様がくっきりと描かれ、両家族の物語が並走していく構造も立体的に演出され、面白い効果をもたらしています。

忠臣であるという理由で、グロスターの役は一般的に人格者として造形されがちです。でもそうしてしまうと、エドモンドが野心を持つ動機が弱くなると考えたんです。ですからここは思い切って、グロスターは正妻の息子であるエドガーを最蔑し、私生児のエドモンドをないがしろにしている図式を明確に打ち出してみました。癪癪を起こして冷静さを失い、判断を誤っていくグロスターがたどる変遷は、あたかも“もう一人のリア”ですよ。『愚かなグロスターをつくる』というのも自分にとって課題のひとつで、（翻訳家の）松岡和子さんが「グロスターを演じる俳優は、リアも演じられる俳優でやらなくてはいけない」とおっしゃっていた意味が、今回演出してみてもよくわかりました。



——森さんが北九州芸術劇場の主催公演に登場するのは初めてです。改めて、演出の道に進もうと思われたきっかけや、演劇の世界に魅了されていった若手時代のことも伺えますでしょうか。

僕は東京で生まれ育ったのですが、幼少の頃から母親に連れられて人形劇などを観ていたこともあり、演劇は割と身近な存在でした。その後、福島大学に進学したのですが、山々に向かって発声している演劇サークルの人たちを見て、「なんて開放的なのだろう！」と軽い気持ちで始めたのが最初のきっかけですね。それで東京に戻ってきたのち、「演劇集団円」に所属して、岸田今日子さんと橋爪功さんといった大先輩と出会い、どんどん道が開けていきました。金田明夫さんの『リチャード 3 世』で演出助手を務めたのが僕にとって初めてのシェイクスピア体験だったのですが、力のある俳優さえいれば日常的ではない台詞でも、肉感を持って観客に迫っていくことができるという実感を得ました。あれは僕の演劇人生において、ひとつの大きな転機でした。円に入らなければおそらく、シェイクスピア作品に関わることは一生なかったと思いますね。

——北九州芸術劇場公演は、ツアーのゴールとなります。最後に、北九州のお客様に向けてのメッセージを伺えますか？

シェイクスピア、あるいは『リア王』というタイトルを、聞いたことはあるけれど、一度も観たことがないお客様は、まだまだたくさんいると思うんです。でも僕と内野さんは、そういう方にこそ真の魅力を届けたいと考えながら今回の舞台をつくり上げました。またシェイクスピアをよくご存知の方は、歌うような調子の台詞回しを想起すると思うのですが、僕たちは「我々の言葉としてシェイクスピアの詩の世界を伝えよう」を目標に掲げて稽古してきました。なので『リア王』を何度も観ている方にとっても、「ああ、こういう物語だったのか」と新鮮な気持ちで味わっていただける舞台になったと思います。シェイクスピア作品は、人間にとっての極大の世界と極小の世界、その両方を同時に見せてくれるところが魅力です。宇宙感覚と皮膚感覚の両方がいっぺんに呼び覚まされます。必ずやお一人おひとりの興味にあった“何か”が見出せると思いますので、ぜひ劇場まで足をお運びください！

森新太郎プロフィール

演出家。モナカ興業主宰。2002 年に演劇集団円に入ると、06 年に『ロンサム・ウェスト』で演出デビュー。古典から現代劇まで幅広く手掛ける。またミュージカルにも挑戦し、ジャンルにとらわれない活動を行う。自身が主宰するモナカ興業でも活動中。13 年に文化庁新進芸術家海外研修制度でアイルランドへ、18 年にシンガポールへ留学。近年の演出作は、『マスター・クラス』『十二夜』(25)、『ヴェニスの商人』『ハムレット Q1』『メディア / イアソン』(24)、『NOISES OFF』『夜叉ヶ池』『パンズ・ヴィジット』(23)、『ヴィンセント・イン・ブリクストン』『奇跡の人』『冬のライオン』『ピーター・パン』(22) など。毎日芸術賞千田は也賞、文化庁芸術祭優秀賞、読売演劇大賞グランプリ及び最優秀演出家賞、芸術選奨文部科学大田新人賞、WOWOW presents 勝手に演劇大賞演出家賞受賞、菊田一夫演劇賞を受賞。

公演情報

10 月 31 日 (土) 15:00 開演

11 月 1 日 (日) 13:00 開演

会場：J:COM 北九州芸術劇場 大ホール

作：ウィリアム・シェイクスピア

訳：松岡和子

演出：森新太郎

出演：内野聖陽

前田公輝、井之脇海、清水くるみ、川上友里、内田慈、大山真志、永島敬三、和田正人、杉本哲太、山路和弘 ほか

▶ 公演詳細



▶ チケット購入



当日券
全公演発売

